

都市-農山漁村交流の効果と課題

～ 交流により地域にもたらされる影響と今後の方向性～

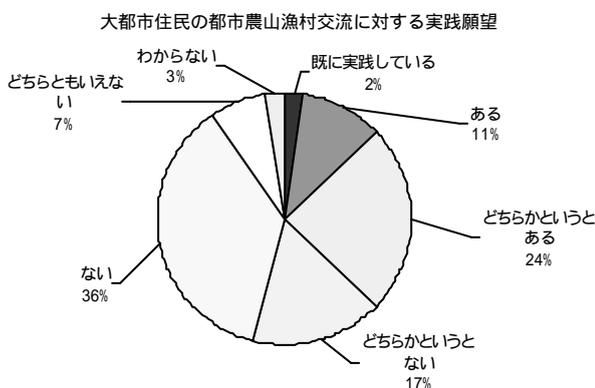
パブリックコンサルティング事業部 副主任研究員 鴨志田 武史

はじめに ～都市農山漁村交流の背景と現状・期待～

近年、都市農山漁村交流は、過疎化や高齢化が進む農山漁村地域の活性化の中核的施策として、全国数多くの地域で取り組まれている。

このような、都市住民が農山漁村地域を訪れ、豊かな自然環境や魅力ある地域文化などを通じて交流する取り組みは、国民の余暇の多様化がいわゆるようになってきた平成初頭ごろから全国各地で見られるようになったものである。最近では、本格的な少子高齢化社会の到来や、(かつて「金の卵」と呼ばれ農山漁村から都市部へ大量流入した)団塊の世代の退職によるふるさと回帰意識の高まり、食の安全に対する国民意識の向上、子供の教育の場としての期待、さらにはこれらを背景としたメディア等での農山漁村地域を取り上げる機会の増加等により、都市住民のニーズが特に高まってきており、農山漁村地域側としてもハード整備のみに頼らない(膨大な財政負担を必要としない)ソフト面を重視した新たな地域振興策として、期待が高まってきている。

図1 大都市住民の都市農山漁村交流の実践願望



資料 内閣府 都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査(平成17年11月調査)より、東京都区部と政令指定都市居住住民の値を合計

また、最近では取組の内容も多様化・差別化が進み、「グリーンツーリズム」に代表されるような農山漁村の自然

や文化を活かした体験滞在型交流が中心であるものの、特に優れた自然環境を舞台とした「エコツーリズム」、農山漁村の環境を健康づくりに活用しようとする「ヘルスツーリズム」など、より詳細なテーマ設定、プログラム設定がみられるようになってきている。

こうした取組みに対しては、国の支援も拡大してきており、以前から積極的に促進を図ってきた農林水産省をはじめ、国土交通省、総務省、内閣府、厚生労働省などもそれぞれの視点から都市農山漁村交流の取組みに積極的な支援策を講じてきている。平成17年には、都市農村交流の他移住・二地域居住も含めた「都市と農山漁村の共生・対流」の推進が副大臣プロジェクトチームから提示されるなど、今や国家的な取組として推進が図られている。

このように、都市側、農山漁村側双方にとって大きな期待がなされている都市農山漁村交流であるが、一方で、その実施による効果や影響については、先進的地域の取組などが参考例として各所で取り上げられているものの、地域の現場サイドでの効果の捉え方や受け止め方は一様ではない場合も多く、期待する効果と実際の効果発現状況とのギャップも見られつつあるなど、現実的な地域づくりの現場からは、様々な課題も散見されている。

前置きが長くなったが、本稿では、今日の地域振興策の中核として位置づけられている都市農山漁村交流について、特に農山漁村地域側においてもたらされる影響・効果についてその捉え方を確認した上で、今後の交流推進にむけた課題点やポイントを、弊社のこれまでの調査・研究等から得られた視点から述べることにする。

農山漁村地域における交流の効果 ～もたらされる効果と懸念される影響～

交流に期待する効果

都市農山漁村交流は、受入側となる農山漁村地域に様々な影響・効果をもたらす。一般的には、都市住民が地域内で消費行動を行うことによる「経済的効果」、都市

住民と農山漁村住民同士が直接的にふれあい、相互の異文化が交流することにより、アイデア醸成や魅力の再発見など、人づくりへの効果を通じた「社会的効果」などがその主な効果として期待されている。

「経済的效果」は、都市農山漁村交流を地域振興に生かそうとする農山漁村地域側が最も期待する効果であり、基本的には来訪者数や消費額など、量的な視点で捉えることができる。単純にいえば、その地域により多くの人を訪れてより多くの額を消費することで効果は拡大するものであり、それ故に、来訪者の拡大、消費拡大を交流プログラム検討の目標にする場合が多い。

一方、「社会的効果」は、主に人と人との交流・ふれあいによって醸成されるものである。普段の生活では気付かない農山漁村地域の魅力や資源を、都市住民という外の目から評価・指摘されることで、地域住民がそれを再認識・再発見したり、或いは都市住民との対話・ふれあいから刺激を受けることで、地域住民の地域づくり意識が醸成され、地域活性化が内発的に進展していく。現実的に人口減少が進んでいる農山漁村地域において、既存の住民による内発的な意識向上による活性化推進の意義は大きいものである。

さて、こうした交流効果は、近年数多く実施されている都市農山漁村交流に関する各種調査や事例でも取り上げられ、具体的な効果の内容やそのプロセスが広く紹介されている。

しかし、交流効果に対する認識や捉え方は、地域の内部で一様ではないことに留意する必要がある。農山漁村地域住民にとっての基礎単位は集落や地区レベルであるにもかかわらず、効果の認識を地域全体でみようとする、その捉え方にギャップやミスマッチが生じる。特に、市町村合併によって行政区域が広域化した中では、この点に特に留意する必要がある。

「交流効果に対する認識の違い」の懸念

例えば、「経済面の効果」は、都市からの来訪者を受入れ、地域内で消費行動が起こることによって域内需要が喚起され、そこから生産誘発等が波及して最終的には税収増や雇用拡大がなされるものと捉えられる。しかし、観光産業や飲食業など、交流に直接的に関与する主体は直接的にその効果を認識することができるが、そうでない多くの地域住民にとって、その効果を実際に認識する場面は少ない。

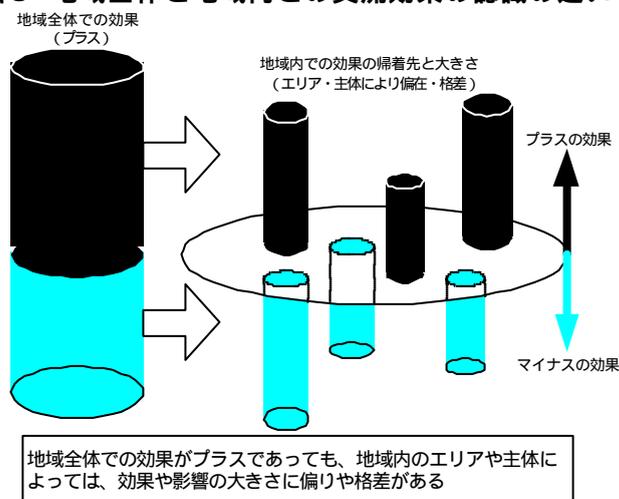
一方、地域住民にとっては、数多くの都市住民が来訪することが地域経済の活性化に寄与するということは理

解しつつも、現実問題として、例えば見慣れない都市住民が自集落内を歩き回ったり、生活道路が渋滞したり、沿道のごみが増加したりといった現象を身近な生活空間で目の当たりにすると、交流事業や都市住民に対して、不安感や嫌悪感といった印象を強く認識するようになる。特に、農山漁村交流で多く見られる体験滞在交流などでは、地域の「生活文化」を売りにする一方、交流者とのコンタクトゾーンが生活空間に近かったり、或いは生活空間そのものであったりするため、地域住民にとってのマイナス面の影響はより強く印象付けられることになる。またより多くの都市住民を集客しようと熱心になればなるほど、都市住民ニーズへの迎合に走り、都市住民の「お客さん意識」を助長して身勝手な行動を煽る恐れもある。

「効果帰着の偏在」

また、主に集落という古くからの「共同体」をベースとした農山漁村地域社会において、経済的效果の獲得は、あらたな共同体活性化に結びつくものである一方、その帰着先が共同体の中で偏在すると、それが共同体のコミュニティ維持に何かしらの影響を与える可能性もある。当然ながら、交流の効果は、その交流事業やプログラムを企画・運営している人々や主体に効果が帰着するものであり、それ自体は当然の理解であるが、特に、その運営に行政の支援が多くなされていたり、地域共通の資源として認識されている自然資源、文化資源を交流に活用している場合、運営者の立ち振る舞い方によっては、地域内の認識のズレを生み出し、結果として交流を停滞させることにつながる恐れもある。

図3 地域全体と地域内との交流効果の認識の違い



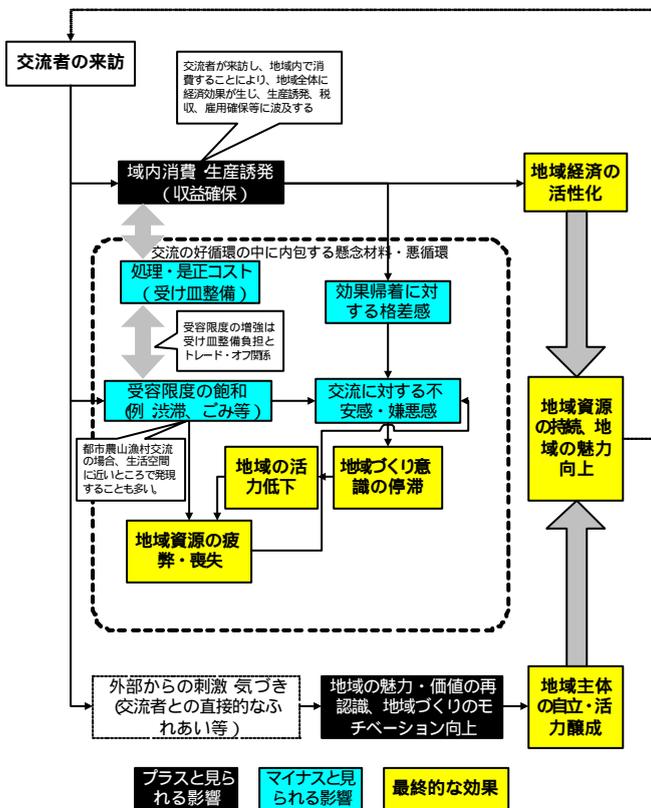
出典：価値総合研究所作成

都市農山漁村交流の課題 ～ 交流を継続させることの重要性～

前述のように、都市農山漁村交流によって地域全体が（プラスの）交流効果を獲得する一方で、交流に直接関与しない主体にとってはそれが格差感や不公平感となり、マイナス面の印象となる懸念がある。しかし、だからといって交流の取組みを停滞させたり、ストップさせたりすることは望ましくない。重要なのは、こうしたプラス・マイナス双方の影響を適切にコントロールしながら、バランスよく交流を継続・成長させていくことである。

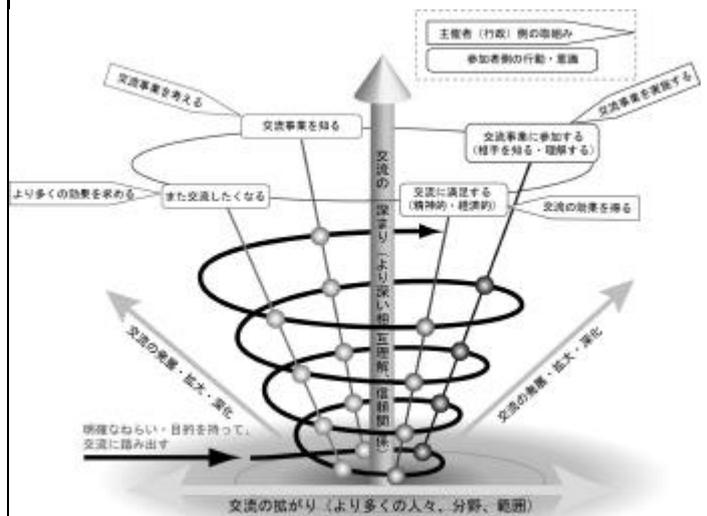
都市農山漁村交流が、プラス・マイナス両面の影響をもたらす可能性があることを認識した上で、いつのまにかマイナス影響の「悪循環」に陥ることが無い様、地域内の相互理解を図りつつ軌道修正を行い、「不安感」や「格差感」を地域づくりへの「刺激」や「気付き」へと転換させていくことが、最終的に交流による地域活性化の「好循環」をうみだすこととなる。

図3 交流によるプラスの影響とマイナスの影響の
関連イメージ



出典：価値総合研究所作成

図4 相互理解・信頼関係による交流の発展のイメージ



出典 総務省 田舎と都会の「縁」づくり (2006年)

都市農山漁村交流の方向性

貴重な農山漁村地域の観光や資源を、短期的、近視眼的な交流効果の獲得のために疲弊させたり、喪失することが無いようにするためには、地域として交流に取組む総合的なビジョンを定めた上で、地域内の相互理解（交流の企画・運営者と、一般住民）を高めることを重視した取組が重要である。

このような視点から、今後、都市農山漁村交流を進めようとする場合に留意すべき具体的な取り組み方向として、以下の3つの視点を提案したい。

相手の見える交流

多くの農山漁村地域では、特に交流相手（都市住民）を特定せず、広く受入れやすい交流メニューを用意する機会が多い。しかしその場合、結局は都市住民にとって「多くの選択肢のうちの1つ」に過ぎず、来訪者の獲得には結びつかない場合も多い。

これに対し、「相手の見える交流」とは、予めメインと交流相手を特定し、相手のニーズに対応した交流メニュー・プログラムを提供するものである。この場合、多くの集客は見込みづらいが、そもそも農山漁村地域側が実際に受容できる限度には限りがあり、前述のように、まずは少しずつ確実に交流を進展させていくことを踏まえれば、交流の初期段階では効果的な方策であるといえる。

具体的には、行政同士の「姉妹都市提携」等による交流が考えられる。行政間での提携は、相互に相手の特性が見えやすいだけでなく、実務面でも、災害時の相互応

援¹や、学校を通じた子供の交流²など、具体的な交流効果も見えやすい。

地域側のニーズを満たす「交流ルール」の提示

2つ目として、「交流のルール」を明確にしておくということが挙げられる。

より多くの都市住民に訪れてもらおうとすると、幅広い都市住民のニーズに対応できるようにする場合が多い。

しかし、その場合、都市住民の様々なニーズに対応しようとするばかりに、地域側での負担が多くなったり、想定した効果が得られなくなり、いわゆる「交流疲れ」を生じさせることも多い。

こうしたことを回避するためには、あえて都市住民に対して「交流ルール」を明確に提示し、それを遵守できる来訪者のみを受入れるような形をとることが考えられる。これはつまり、地域側のニーズも明確に提示するということであり、地域の「誇り」を尊重するということでもある。地域側のニーズ（誇り）を明示し、ルールとして定めることは、「相手が見える交流」と同様、都市住民の量的な来訪者数は絞られることとなるが、「マイナスが増えるくらいならプラスもいらない」といった点を重視して取組むことで、地域資源が保全されるほか、またその明確な主張が、都市住民へのアピールポイントになる可能性もある。

図5 滞在型交流施設における利用条件（ルール）の例 【長野県四賀クラインガルテン】

クラインガルテン区画内における花・野菜作りは有機無農薬農法で行うこと（有機無農薬栽培が行えるように、講習会の他、個別指導も受付け）
冬季期間を除きクラインガルテンを1ヶ月に3泊ないし6日以上利用し、区画内の草取りなど必要な手入れをし、美しい庭づくりを積極的に行うこと。
滞在中必要な日用品、資材等は村内で調達すること
年間活動プログラムや交流事業に積極的に参加すること
残飯等はコンポスト化し、循環型環境共生に向け取組むこと
ゴミは持ち帰ること

出典：国土交通省「交流等による地域への影響に関する調査」

- 1 例えば、新潟県川口町と東京都狛江市との間では、「災害時における相互援助に関する協定」を締結し、消防団の研修や川口町・狛江市の交互で物資輸送等の訓練を行うなど消防団同士の信頼関係や地理的条件の把握が進んでいた。この結果、平成16年10月の新潟県中越地震では、川口町周辺の主要道路が寸断されたにもかかわらず、土地勘のある狛江市の応援隊が川口町の被災地に最も早く駆けつけることができた。
- 2 例えば、群馬県川場村と東京都世田谷区では昭和56年に「区民健康村相互協定に関する協定（縁組協定）」を締結し、昭和61年に川場村に開設した「世田谷区民健康村」において、世田谷区立小学校全64校の小学5年生が2泊3日の日程で農業体験や登山などの屋外活動を行っている。

外部からの客観的な評価者の確保

3つ目として「外部に客観的な評価者・支援者を持つ」ということが挙げられる。都市農山漁村交流の取組自体は、地域内の主体が中心となっていくべきであるが、PDCAの事業サイクル全てを地域内の主体のみで進めることは、都市住民という地域外の主体を対象にする以上、望ましいものではない。そのため、外部からの評価者として、都市住民側の人々や、第三者的な有識者を地域のご意見番として活用することが重要である。具体的には、専門家やコンサルタントなどの他、都市住民へのアンケート調査等も考えられる。いずれにしても絶えず外部とつながり、率直な意見を取り入れられる窓口を用意することが必要である。

おわりに

都市農山漁村交流を継続させ、地域の活性化に結び付けていくためには、前述のような様々な効果や課題の全体等をイメージしつつ、まずはどのような形にせよ最初の一步を踏み出すことである。地域側が「知恵を絞って」交流に取組み、そして交流を行うことで「知恵をつける」。こうしたサイクルを続けることで交流が成長・進化していくものである。

弊社としても、各種調査・研究を通じて、交流による効果・成果のみならず、その過程で生じる影響や課題、解決方策などについて幅広く知見を集約し、熱意を持って取組もうとする地域に積極的にフィードバックしていきたいと考えている。

<参考文献>

国土交通省「交流等による地域への影響に関する調査」(2007年)
総務省「田舎と都会の「緑」づくり」(2006年)